

Special Essay

<温故知新>

内分泌代謝内科部門
廣松 雄治

図書館ニュースへの寄稿を依頼されたが、この数年間図書館へほとんど行っていない。いろいろな要因が重なってそうなったと思われるが、図書館との関わりについて記憶を遡ってみたい。

小学校の頃は図書室があって読書の時間や休み時間に図書を借りて読んだ。特にトムソーヤの冒険やハックルベリーの冒険に夢中になり、戸外でいかだを作ったりして堀で遊び数回おぼれそうになったのを覚えている。

中学生のときは図書室へ行った記憶がない。

高校生の頃は学校帰りにほぼ毎日西鉄久留米駅ビル内の書店で立ち読みをし、おもしろい文庫本があれば買って読んだ。

大学に入ってから3年生になってはじめて図書館を利用した。冷暖房が完備されているため、試験前になると図書館へ行って勉強していたと記憶している。

第1内科に入局するとともに大学院に進学してはじめて、図書館での文献の探し方を先輩から教えてもらった。悪性リンパ腫の患者に当時 VEMP 療法を行ったが、一時縮小したリンパ節が再び増大した時に、図書館で治療法について調べた。American J Medicine にブレオマイシンをベースにした新しい chemotherapy があり、早速コピーしてオーベンの先生に相談した。カンファレンスの結果、投与することとなった。必ずしも教科書通りに治療はうまく行かないことを知った。患者に投与した薬は全て文献を集めなさい。胸部レ線をみたら、起炎菌はなにか、抗生剤の MIC を考えて処方するように教えられ、胃透視は、癌がどこまで浸潤しているか考えて撮れといわれ、先輩の先生を尊敬して過ごした。

2年目になると神経内科の病院へ3ヶ月間出向した。多数の患者を受け持ったが、神経の診方、脳波の読み方、ルンバールや脳血管造影、気管切開などいろいろと経験できた。病院の医局には専門の雑誌や英文誌などがあり、研究室には脳や脊髄の連続切片があった。脳の解剖をさせていただいたり、CT アトラスの作成などに関わったりと充実した研修を受けた。

2年生の秋に、学位のテーマをもらい研究を開始した。文献を集めるよう指示され、3段のファイルキャビネットを購入し、4年間でいっぱいになるくらい「インフルエンザウイルス」に関する論文を集めた。3年生になってはじめてベッドフライとなり、研究に専念した。研究室か図書館かと云われるくらい、速報誌をチェックするのが日課であった。しかし書庫は冷房が効いてないため汗だくとなっていた。コーヒブレークに喫茶店にもよく通った。

今は大学でのほとんどの時間を外来診療に費やしている。新臨床研修医制度の導入などによる入局者の減少、午後診療や事務処理の増大などの負担増、インターネットの普及などにより、研究ばかりでなく、図書館も遠のいている。体重も10kg増加し、メタボとなっている。「20代の日々の感動と情熱」が懐かしい。

「医師国家試験の成績が悪いぞ、何とかしてくれよ。肩身が狭いよ」というのが、クラス会の度に他県で活躍している本学出身者の声である。昨年より教務委員会の委員となり医学教育ニ

ースの発行のお世話をすることとなった。効率のいい教育法や教育論などに疎いのに加えて、コアカリキュラム、テュートリアル、CBT、CCL、e-learning と医学教育改革の大きな波、新臨床研修医制度の発足、医療制度の変革などに呑み込まれて、自分自身の motivation の維持さえ難しい今日この頃である。まして他人をその気にさせるのはとても並大抵ではない。私たちは小さい頃から遊びながら、体を動かしながら学習してきた。覚えることに費やす時間はほんの少しであり、多くの時間は記憶を引き出し、定着させるのに費やしてきた。すなわち見て、聴いて、言っ、書いて、体を動かして記憶を引き出し、実践・体験し、さらに何度も反復してきた。これはヒポクラテスの時代から変わらないような気がする。教育効果を上げるには「体得」することであろう。「1%のひらめきと99%の汗である。」

それから私どもは誰でも、体内時計をもっており、最大の能力を発揮するには、日内リズムを整えることが大切である。これは今年の医師国家試験の結果をみても明らかである（医学教育ニュース参照）。

そろそろコーヒブレイクにいたしたい。

「知識は失敗より学ぶ。事を成就するには、志があり、忍耐があり、
勇気があり、失敗があり、その後、成就があるのである」

東芝の創始者で、久留米市出身の田中 久重の詞である。



Coffee Break